

研究種目： 基盤研究（B）
 研究期間： 2005～2008
 課題番号： 17300274
 研究課題名（和文） 教師によるカリキュラム開発を支援する
 学校研修システムに関する実証研究
 研究課題名（英文） An Empirical Study on School-Based Teacher Training System to
 Support Curriculum Development by Teachers
 研究代表者
 浅田 匡（ASADA, Tadashi）
 早稲田大学・人間科学学術院・教授
 研究者番号： 00184143

研究成果の概要：

本研究は、次の4つのアプローチを行なった。教師の認知に関する研究に関しては、教師の認知と子どもの認知とのズレは学習方略、思考内容・思考過程などにおいて大きいことが明らかになった。単元開発に関する研究に関しては、単元開発の進め方（相互作用）によって教師の学びに差があることが示された。校内・園内研修に関する研究に関しては、校内研究は必ずしも教師の成長・発達におよびカリキュラム開発に関する知識創造が生起していないことが示された。また、校内研究が十全に機能するためには、継続的な記録、互いが心理的に支え合う文化（風土）、プライマリーグループの存在、組織へのコミットメントが関連することが示唆された。メンタリングに関しては、徒弟的關係に基づくメンタリングが行われ、心理社会的機能が重視されていることが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	3,200,000	0	3,200,000
2006年度	4,300,000	0	4,300,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
総計	13,900,000	1,920,000	15,820,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学 教育工学

キーワード：校内研修 カリキュラム SBCD 職能発達 教員研修

1. 研究開始当初の背景

幼稚園教育から大学教育まで学校教育を取り巻く環境はめまぐるしく変化し続けている。その一因としてグローバル化に伴い、それぞれの地域で行われてきた教育の質の明確化が求められることがあげられよう。また、PISAをはじめとする学力の国際比較調査もそのことを後押ししてきた。わが国においては、PISAやTIMSSの結果、順位や平均点が後退している結果を受けて学力低下論争が生じ、その結果として「ゆとり教育」の見直しなど、学力向上が教育改革の大きな柱となっている。いわゆるナショナル・カリキュラムを変えていけば学力が向上すると言わんばかりである。

しかしながら、1988年にナショナル・カリキュラムが導入されたイギリスにおいて、そのカリキュラムが実効するポイントは、教師にあった。学校のカリキュラム全体をつくるということなしに、ナショナル・カリキュラムは有効に機能しなかったのである。その流れの中で、近年、学校を基盤とした研修システムである校内研修システムが、教員養成と現職教育、特に継続的な教師の専門性の発達において有効であると捉えられるようになってきた。アメリカにおける Professional Developmental School やイギリスにおける Training School などはその考え方が反映している。特に、我が国の教師教育システムの特徴の1つである、授業研究が“lesson study”として注目され、さまざまな形で行われるようになってきた。しかしながら、個々の教師の成長に焦点化され、学校を基盤としたカリキュラム開発と結びつけた捉え方はされていないのが現状である。

したがって、学校を基盤としたカリキュラム開発と校内研修とをいかに結びつけるかが、教育改革の大きな課題である。

2. 研究の目的

教師自身がカリキュラム開発を行っていくことができるような、すなわち、学校を基盤としたカリキュラム開発を行っていくための学校研修システムのあり方を検討する。具体的には、以下の4つの研究領域について個々に研究を行った。

- (1) 授業場面における教師の認知および子どもの学習行動に関する研究

学校研修システムがうまく機能するための前提として、個々の教師の力量が問題となる。特に、授業をどう認知し、それに基づく反省的思考は重要である。研究目的は、教師による子どもの学習方略の認知と子どもの認知とのずれ、教師による子どもの思考過程の認知と子どもとのずれを明らかにし、授業(教室)における教師の認知の様相を明らかにすることである。

- (2) 単元開発における教師の相互作用に関する研究

小学校生活科の単元計画立案過程と幼小連携における単元開発・実施・評価過程における教師間の相互作用を明らかにする。

- (3) 校内研修および園内研修の取組み、特に教師間の相互作用に関する研究

園内研修・校内研修の実情を明らかにするとともに、小学校校内研修を対象に、教師間の話し合いの内容及び新たな知識創造の様相を明らかにするとともに、話し合いにおけるキーパーソンである教師の役割を同定する。

また、校内研修を経験することによる教師の組織コミットメントへの影響を明らかにする。

- (4) 初任者研修を中心としたメンタリングに関する研究

校内研修において教師同士の教え合いが重要であるが、経験教師が若手教師にどのように働きかけるか(メンタリング)を教育実習および初任者研修を対象に明らかにするとともに、校内研修等で使えるビデオを活用したシステムの開発し、その評価を行う。

3. 研究の方法

共通して用いた方法は、授業および校内研修・園内研修のビデオ録画とそれに基づくトランスクリプトを基本データとすることである。

- (1) では、あわせて質問紙調査およびインタビュー調査を行なった。
- (2) では、メーリングリストを活用したデータ収集を行なった。
- (3) では、あわせてインタビュー調査および質問紙調査を行なった。
- (4) では、あわせて質問紙調査を行なった。

分析は、基本としてはカテゴリ作成とそれに基づく内容分析を行なったが、一部、基本統計と多変量解析を用いている。また、校内研修の分析およびメンタリングの分析の一部では、言語データを形態素分析から数量化類を用いたテキストマイニングを行なった。

4. 研究成果

(1) 教師の認知に関する研究

ワークシート作成に関しては、教師が考える学習活動と生徒が行う活動にはかなりのギャップがあり、生徒は「正しい」成果物を完成させることに意識の向いていることが示唆された。自分自身で選択した情報がワークシートにほとんど見られず、この活動にあてられた時間に実質的な活動を行っていないと考えられる生徒も存在し、自分でわざわざ情報を探さなくても、後で黒板に示される「正答」を書き写せば良いととらえていたと考えられた。

学習ストラテジーの認知については、教師は個々の児童の認知を捉えることは学年当初だけでなく1学期終了時点でも困難であった。教師の教育理念に適合した学習ストラテジーの認知は児童の認知と一致するが、新しいストラテジーなどは一致しなかった。それは教師が自らの教育理念を授業などにおいて児童に伝えていることによると考えられた。

教師による児童の思考過程の把握についても困難であった。児童の思考結果を博するのが約50%であり、思考過程についてはほとんど把握できないことが明らかになった。

(2) 単元開発に関する研究

生活科の単元開発において、校内研究が必ずしも教師の成長・発達には機能していないことが明らかになった。情報伝達・確認という場であり、新たな知識転換と獲得の場にはなっていなかった。

幼小連携の単元開発においては、授業日誌法を中心としたカリキュラム開発のシステムを作り、さらにメーリングリストを活用した仕組みを構築した。そこでは、幼小の教師がメンターの役割を果たしていることが明らかになったとともに、カリキュラム開発の過程で個々の教師が様々な学びをしていることが示された。

(3) 校内・園内研修に関する研究

校内研修が、現状では教師の成長・発達および学校を基盤としたカリキュラム開発には必ずしも機能していないことが明らかになった。その原因として、授業を検討する際に、授業の背景などを考慮せず、指導法や子ども

の学習活動だけに焦点化するという教師の授業の捉え方が示唆された。この問題を踏まえて、教師自身の省察に焦点化した園内研修の試みを行なった。

校内研修がカリキュラムに関する知識創造の場として機能するためには、知識コーチあるいはトランスフォーマーと言われる存在が必要であるとの観点から、小学校校内研修を分析したが、それらの役割を担う教師の存在は必ずしも確認できなかった。それ故、校内研修の話し合いが拡散する傾向が明らかになった。

校内研修への参加が、教師の組織コミットメントを高めるかということに関して、全体的な研修は必ずしも組織コミットメントを高めないが、教師同士の相互作用がある研修では組織コミットメントを高めることが示された。

(4) メンタリングに関する研究

教育実習における指導教師の働きかけが、実習生の職業的アイデンティティ、省察、および指導教師との関係に及ぼす影響を見た結果、職業的アイデンティティの発達を必ずしも促さず、関係は徒弟的關係にとどまり、省察は対面指導が効果的であることが明らかになった。その理由としては、実習期間が短いこと、実習期間での教育内容が多岐にわたり量的に多いこと、教育実習に関する固定的な見方などが考えられた。

初任者研修においては、On-going法を組み入れたビデオ活用システムを開発した。これは、指導教師の授業の問題把握をビデオで示すことにより、初任者が問題把握を深めていくことを開発コンセプトとしているが、2名の初任者において問題把握が深化することが示された。

また、このシステムにおける指導教師のコメントの変容を分析すると、誉めるといふ社会心理的な機能が中心にあり、キャリア機能である教科の指導法よりも学級経営を中心とした情報提供が多く行われていることが示された。

以上の研究は、日本教育心理学会、イギリス教育学会、ヨーロッパ教育学会で発表され、研究成果報告書としてまとめられた。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 12 件)

佐古秀一 民間的経営理念及び手法の導入・浸透と教育経営 - 教育系研究の課題構築のために - 日本教育経営学会紀要 49 37-49 2007 査読有

山本裕子・浅田匡・野嶋栄一郎 教員の捉えた学校組織の課題の同定: 総合選択制高校における事例研究 日本教育工学会論文誌 30(4) 409-418 2007 査読有

浅田匡 幼稚園教育実習におけるメンタリングの機能に関する研究 教育心理学年報 46 156-165 2007 査読有

佐古秀一 学校組織開発研究の視点と方法論に関する基礎的考察 - 学校組織の变革課題と变革方略について - 鳴門教育大学研究紀要 22 54-64 2007 査読有

浅田匡 教師としての成長とは何か 教育フォーラム 40 26-36 2007 査読無

魚崎祐子・浅田匡 総合的な学習の時間における教師の支援が生徒の情報選択に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌 30(Suppl) 89-92 2006 査読有

山本裕子・浅田匡・野嶋栄一郎 学校組織運営上の課題に関する探索的研究: 単位制高校における事例研究 日本教育工学会論文誌 29(4) 567-575 2006 査読有

佐古秀一 学校組織の個業化が教育活動に及ぼす影響とその变革方略に関する実証研究 - 個業化、協働化、統制化の比較を通して - 鳴門教育大学研究紀要 21 41-54 2006 査読有

浅田匡 授業から学びあえる教師になるために 教育展望 52(5) 12-19 2006 査読無

佐古秀一 学校の組織とマネジメント改革の動向と課題 日本教育行政学会年報 31 51-67 2005 査読有

佐古秀一・中川桂子 教育課題の生成と共有を支援する学校組織プログラムの構築とその効果に関する研究 - 小規模小学校を対象として - 日本教育経営学会紀要 45 96-111 2005 査読有

浅田匡 教育改革に求められる教師の力量 教育展望 51(3) 48-54 2005 査読無

[学会発表](計 8 件)

Tadashi ASADA An Analysis of Mentor s On-going Comments for Mentee s Teaching. The European Conference for Educational Research 2008 refereed

國府島貞治・淵上克義 組織コミットメントの変化についての調査 日本教育心

理学会第 50 回総会発表論文集 250 p 2008

Yuko UOSAKI, Tadashi ASADA The Cognition of Pupils and the Teacher on the Use of Learning Strategies. The Australian Association for Research in Education 2007 refereed

Rieko IWAHAMA, Tadashi ASADA A Model of School System to Develop the School-Based Curriculum and Support CPD Using Reflection and Action Research. The British Educational Research Association Annual Conference 2006 refereed

Tadashi ASADA, Yuko UOSAKI A Study on the Mentoring System for Beginning Teacher. The British Educational Research Association Annual Conference 2006 refereed

Tadashi ASADA, Yuko UOSAKI, Maya UETA A Study on Teacher s Recognition of Students Thought Processes in Classroom Instruction. The European Conference for Educational Research 2006 refereed

Tadashi ASADA, Yuko UOSAKI, Kei KOMATSU A Study on the Making Process of Learning Unit As Professional Development in Japan. The European Conference for Educational Research 2005 refereed

Tadashi ASADA, Yuko UOSAKI A Study on the Function of Mentoring System in Student Teaching in Japan. The British Educational Research Association Annual Conference. 2005 refereed

[図書](計 3 件)

淵上克義 「学校組織の人間関係と教師の意欲」中谷素之編著『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり - 動機づけの教育心理学 - 』金子書房 216p 2007

佐古秀一 「学校改善と組織改革 - 学校組織の個業化、統制化、協働化の比較を通して - 」北神正行・高橋香代編『学校組織マネジメントとスクールリーダー』学文社 61-74 2007

佐古秀一 「学校組織開発」篠原清昭編著『スクールマネジメント』ミネルヴァ書房 155-175 2006

6 . 研究組織

(1)研究代表者

浅田 匡(TADASHI ASADA)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00184143

(2)研究分担者

野嶋 栄一郎(EIICHIRO NOJIMA)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：20000086

魚崎 祐子(YUKO UOSAKI)

早稲田大学・人間総合研究センター・講師

研究者番号：20386650

(3)連携研究者

佐古 秀一(HIDEKAZU SAKO)

鳴門教育大学・学校教育学部・教授

研究者番号：30153969

淵上 克義(KATSUYOSHI FUCHIGAMI)

岡山大学大学院・教育学研究科・教授

研究者番号：20202294